

に田中氏は年齢に似合わず十才位若く見えた。

以下田中ご夫妻のお話。町の建物の硝子は目茶苦茶に割れてそこ此処の建物や家は壊れ見るも無惨その物であったと言う。又、死傷者の家の人々の救いを求める顔は狂気その物であったと言う。又、(爆弾を投下された家の農耕馬の首が数十米も飛びその外に馬数頭が焼死したと言う山中長三郎氏談)。

八幡宮の隣りに投下された爆弾で石の鳥居が数十米離れた元麴屋の屋根に飛び家は目茶苦茶に壊れたと言う。敵機監視役をしておった人も亡くなり、元伊藤製材所付近の田圃にも爆弾が投下され大きな穴が数ヶ所にあいたと言う。

終戦から半世紀以上、五五年経過した今は、唯一人として当時の金木町空襲を語る人もなく忘れ去り、枯れ葉の如く遠い彼方に消え去っているが、金木町としては昭和二十年七月十五日終戦直前の米軍機の空爆と機銃掃射を永久に風化させてはならないと思う。戦争は国と国との事情もあると思うが人間を苦しめ不幸のどん底に導き人命と財産を奪うのが戦争である。

子供の頃の遊びを憶う

子供の頃の悪戯や無邪気な遊びは何様にでもあると思うがこの年になっても過去を振り返って見ると色々な遊びを想い出すが、昔は今の様にラジオもテレビもなかった私達の子供の時代

坂に乗ったのも思い出の一つである。

○屋根から落ちて積った雪で大きな雪の坂を造って、雪の坂のてっぺんに「落とし穴」を掘って木の小枝で雪穴に蓋をして、その小枝の上に雪をかぶせて知らぬ顔をしている。友達を連れて来て雪の坂の天辺に登らせた途端に友達は雪の穴の中に落ちる。友達は手を叩いて笑い喜んだ。

○俗に「ズグリブツケ」独楽を打ちつける」である。この「ズグリブツケ」には割れても取らない事、見えなくなっても取らない事と口約束をするが、各自の「ズグリ」独楽を入れる範圍の場を「ズグリ」で雪の上に「ヨダレ」唾液」をつけてまくと氷の様に光って堅くなるが、各自のまいた範圍を目掛けて合図の気合いを入れ、一斉に力強く「ズグリ」の縄を引くが「ズグリ」は最初は勢い良く回るが、次第に力尽きて回転が鈍ってくるともう十回、もう五回と思いいに各自の「ズグリ」を打ちつける。

○子供の頃は冬の寒中でも雪の上を薄暗くなるまで外で遊び、着物の裾は凍って親達は子供が寒いだろうと心配する程もなく、寧ろ温かそうな顔をしている。子供の凍った裾を母は飯を焚きながら囲炉裏で子供の着物を乾してくれた。

○冬には屋根の軒下に雀が泊まっているので、小さな網を持って雀が泊まっている所に小さな網を当てて雀を捕って寒雀だと言って焼いて食べた事もあった。

○雪も消え始める頃に苗代や田圃は氷が張ってあるので、子供

は、自然を相手に遊ぶより方法がなかったが、それでも元気一杯で風邪や病気もせずその時代に即応した遊び方をしたが、子供の頃の遊びは生涯の忘れ得ぬ思い出であると憶うので断片的だが簡単に綴って見た。

○夜長の冬に夕飯が終ると囲炉裏を囲みながら、父母から、昔コ(昔話)を良く聞かされた。

昔々、或るお寺和尚さんが、晩に本堂でお経を上げていると戸を叩く音がするので、戸を開けて見ると頭が血だらけの女が立っている和尙さんは早速、薬を持ってくると誰もいない。和尙さんは気味悪くなり本堂に行つて、又お経を上げた。翌朝、村の檀家の人に来て、隣の家で夕べ餅をついていたら「アン取り」をしていた隣家の妻が誤って頭を杵で打たれて死んだと言う。トッチバレ(終り)。

又、ナゾナゾ(謎)が当時、子供等の中で盛んに流行した。

(朝に起きると紅いジョウウグウ掴む物なんだ火箸)

(海をひと跨ぎする物なんだ鍋のツル)

(一本足で荷物背負っている物なんだ魚を刺した串)

○何年頃前に出来たか知らないが、私共の学校時代に嘉瀬では観音山に「スキー場」があった。当時の生徒の大半にはスキーがなかったので学校では五十台位のスキーを生徒に貸してスキーを乗せたが「第一スロープ」やあの急な傾斜の「薬師流れ」の

達は当時「ベンジャースケート」が流行したが、その「ベンジャール」と言うのは下駄を少し狭くした様な形で藁の縄を鼻緒にしてつけて履いて滑って遊んだ。

○節句が過ぎると雪解けが早まり、雪解けの小堰の水の流れを利用して子供達は木の「柁」で小さな水車を造り、流れ水の勢いで競争して喜んだ。

○この時即ち苗代一面は雪解け水で一杯になり、苗代を良く気をつけて見るとそこに小さな一・五ミリ位の穴があり、その穴を楾で掘って見ると冬籠りの泥鰌が必ずいた。捕った泥鰌を瓶に入れて何匹捕ったよと仲間自慢した。

○春、早々に小田川の土手に小さな鍋と味噌を持って行って「アサドキアサツキ」を採り、又、田圃の堰から田螺を採って鍋に入れて煮て食べたが美味しかった。

○私の家の二軒後ろに劇場があった。当時の劇場の外回りは「サクリ板」で板の割れ目や節目が所々にあった。その板の割れ目や節目に春には雀が入り、営巣して卵を生むのだが、子供達は卵を取る為に「サクリ板」を壊して雀の卵を取って悪戯をした。

○春には野原(今のタケノ現畑)に友達数人で遊びに行つて兵隊ごっこ「真似ごっこ」をして遊んだが「兵隊ごっこ」遊びは約一米位の棒切れで(剣と言った)敵の大将を切ると勝ちとした。又、兵隊ごっこが飽きてくると「野火」遊びをして遊んだが、すぐ野火を消し止めた。

○日差しも一段と明るさが増して道路も完全に乾いた頃に原田自転車屋（嘉瀬鍛冶町）では修理廃品の「タンガリール」を子供達にくれた。子供達は大喜びで「タンガリール」の真中に木の棒を入れて「タンガ」の回転を流れるままに自由自在に回して遊んだ。

○今の子供達は「ウルメコメダカ」と言っても知らない子供達が大勢いると思うが、私共、子供の頃は苗代の小堰や田圃の堰等に「メダカ」嘉瀬ではウルメコと言った」が重なる程に無数に泳いでおったので、小さな網ですくって取り瓶に一杯入れて自慢した物だが、自然環境が破壊され、魚介類、又、各種の小鳥の鳴き声、螢や蛙、その他の動物等が余り見られなくなった。

○又、春先には山や野原に行くとき々な野鳥の鳴き声が聞こえ、店から「トリモツ」を買った所々の木に「鳥モツ」小鳥がモツに足をつけると離れない」をつけて、小鳥の鳴き声を真似て鳥寄せをして小鳥を取った事もあったが、今は小鳥の鳴き声は余り聞かれなくなった。

○私共が子供の頃は水田や田堰に蛙の卵や「オタマジヤクシ」が所々に見られ、又、田圃に行くと蛙の鳴き声がうるさい程に方々から聞こえ、特に雨模様時には耳を塞がなければならぬ程に蛙の大合唱だったが、今は余り聞かれなくなった。

○私共が子供の頃は自動車もなく、たまに荷車が歩く程度だったので道路が乾いていると道路上で「バスボール」今の野球

が盛んに行なわれ、チームを組んで勝負を争って対抗した。

○凧にも大小の色々な種類があるが、普通は半紙凧で更に大きくなると一枚凧やそれ以上もあったが、大きさもそうだが「グング」の鳴る音が村中に響けとばかりに唸り声の音を出すのが魅力的だった。凧を買うお金もなく自分で作って飛ばしたが好きな武者絵を自分で描いて、出来上がった凧を揚げる糸がないから、母の裁縫箱から木綿糸を盗み田圃で凧揚げをして遊んだ。

○田植時には赤ん坊を背負いながら田植に行っている「母」に乳飲児をおんぶして母が乳飲児に乳を飲ませている間に田堰から「ガツギ」方言」や「ベッコカ」方言」等を探り「母」が乳飲を終えると赤ん坊を背負って家に帰り、弟妹や隣近所の子供達に「ガツギ」食べるに良い」や「ベッコカ」をくれて鼻の下に髭を生やして喜んだ。

○小田川と旧十川の終点のすぐ南側の所に私達の子供の頃に約二町歩位の林檎があった（今のオ末場）その林檎畑には、夏になると沢山の蟬がいて、天気の良い日には耳も破裂する様な数匹の蟬が鳴いている。友人二三人で蟬を取り籠に入れて持ち帰り隣家の子供達にくれた。

○雑木の立木の腐った木に小さな穴があると、その中を良く見ると「兜虫」や「クワガタ」嘉瀬では鬼コと言った」が入っており捕って「兜虫とクワガタ」と喧嘩させて喜んだが、今は余り見られなくなった。又、野原に行くと所々に真赤に熟した野苺が生えており採って食べたのも思い出の一つだったが、食べ

物の少なかった子供の頃は「スグリ」方言」や「スモモ」方言」等まだ熟しないのを生で採って塩をつけて無茶無茶食べたが腹も病まず当時の子供達は少し位の細菌にも抵抗性があったと思う。

○竹鉄砲と言ったが、赤子の小指位の太さの細い竹で長さ三寸位に切って竹の穴に紙を口で噛んで丸くして紙の玉を造り竹の穴に詰めてその上から箸位の太さの棒で押すと紙玉が「ボン」と音を出して飛び出す仕掛けになっているが、夢中になり遊んだ。

○春から秋にかけて子供達は「ビダ」打ちがあった。「ビダ」を店から買って来て「ビダ」打ちをするが、「ビダ」打ちにも遊び方が色々あった「オコレコ」「カドブツケ」と言っているが、大きい「ビダ」を「オケ」大きいと言いう意味」小さいのを「ツベコ」小さいと言いう意味」と言った「ビダ」は相手の「ビダ」を風圧で裏返しにすると勝ちで相手の「ビダ」を取るに良い事になっている。負けた人は、又、店からビダを買って来て勝った人に対抗して勝負を争った。

○昔は大抵の家の前後に大木が生えておったので夏の暑い日にはその大木の枝に櫓を掛け、昼夜涼を取り寝泊した事もあった。○螢も七月下旬頃になると、晩には螢取りをして家に持って帰り蚊帳の中に放して螢を眺めて眠ったが、今は余り見られなくなったが淋しい限りである。

○今もあるかも知れないが、昔は子供用の木製の玩具に「団子

上げ」剣玉」があった。小さな木製の団子を糸で吊して「団子

を上げるのだが、小さい皿が三ヶ所につけており、その皿に糸で吊した団子を振動で皿に上げる様になっており団子上げの遊びをして楽しんだ。又、玩具の「ヨーヨー」もあったが「ヨーヨー」は木製の直径約二寸位の円形をした二重にくっついた板状の真中に糸を回して手で「上げ、下げ」をさせて「クルクル」と回して遊んだがとても面白かった。

○私共が子供の頃に竹馬が大流行した。竹馬は嘉瀬では木の棒で作ったが長さ一米五十位の長さに足を掛ける所をつけて作るが私も父母に竹馬を造って貰い友達と竹馬走りでどっちが走るに早いか競争して転んだ事もあった。

○昔の子供達は冬や春先には「カルタ」取りで良く遊んだ。忘れもしない当時の「カルタ」取りは「知らぬが仏蜻蛉頭」「犬も歩けば棒に当る」「鬼に金棒」「花より団子」「頭かくして尻かくさず」等があり、これ等を読み上げて数人の子供等が手早く「カルタ」を取り、何枚も「カルタ」を取った人が勝ちであり喜んだ。

○又、思い出して見ると「陣取り」俗に嘉瀬で言うボコリナツヨウコ」と言う遊びがあった。二組に分かれて片方の組は五人位ずつに分かれて敵と味方に分かれて大将を決めてその大将を奪った方が勝ちだったがその外に「助け鬼」等をして良く遊んだが、道路が乾いている時には長さ六尺位、巾三尺位の中に一尺四面位の点線を道路に書いて「一掛、二掛、三掛と小さ

な石を足で蹴り、十点位まで四角な点線から外れないで蹴り出すと勝ちであった。この外に子供の頃の遊びに「竹蜻蛉を飛ばしたり、女の子達は「アヤトリ」「オハジキリアンコ」等をして遊んだ。

○私共が小学校の頃に村の中を異なった音で自転車が走って行くのを良く見掛けたが、当時は村には自転車も珍しく「オートバイ」もなかった時代であった。持主は松川専五郎氏である松川氏は自分の自転車に小さな「エンジン」を取り付けて走らせているのである。私共が登下校の途中であるから物珍しげに良く見た物だった。

○私共が子供の頃は鮎や鮒、田螺は田堰や溜池には沢山あったので大堰や小田川、十川等に雑魚釣りに出掛け一升籠一杯近く捕った事も忘れられない思い出であるが、鍛冶町の大堰で友人と手探して蟹穴に手を入れて蟹の鉋で指を剪まれて痛い悲鳴をあげた事もあった。

○旧の七月七日、七夕祭り前後に嘉瀬鍛冶町の薬師神社の隣の沢田定義さん宅の前の小堰で「カーバイト」遊ばせ発生する「遊びをしたが「カーバイト」遊びは長さ一尺位、直径二寸位に竹を切り、筒状にして筒状の竹に水を三寸位と「カーバイト」を入れると「グツグツ」煮立った中に「マツチ」で火をつけて筒の中に入れると「ドンドンドン」と音がするので子供達は大喜びであったが「カーバイト」の匂いが遠くまで匂った。○暑い日には嘉瀬溜池（清久）に雑魚釣りに出掛けたり、飽き

てくると「トジナリ方言」の実を採って顔一面に塗り「土人の顔だと喜んで遊んだが、秋近くなると田堰の水の流れがないので堰を堰止めて溜った水を「バケツ」で汲み上げて雑魚を捕った時も度々あった。

○昔は大抵の家の「トロジロ土間」に燕が営巣して子燕が生まれて大きくなると頭を揃えて、夕日が西に傾きはじめる頃に数十羽の子燕が所々に群をなして電線に止まって、親燕が餌を運んで持ってくるのを鳴きながら持つておったが、今は余り見られなくなった。

○稲を刈る頃になると澄んだ真青な空の夕陽が沈む頃になると赤蜻蛉の群れが無数に飛び、子供等は赤蜻蛉を捕って蜻蛉の尻尾に糸を結んで遊んだが、この頃には大きな飛蝗も出て来て網で捕って遊んだ。

○秋には友達と手籠を持って野原や山に「茸」採りに出掛け「イクツ」「サモダシ」「ハツタケ」「土被り」その他の「茸」を採ったが天気の良い日には蛇を時々見たが、棒を持っているので蛇を捕って殺した時も度々あった。

又、蛇を殺して皮を剥いで焼いて食べたが、鮫の味がしてとても美味しかった。

寄稿

引き揚げ始末記

前回、金木のかたりべ第十四集に満州放浪記を掲載して頂いたので、それをもって終りにしようと思っていたところ、会の方から引き続き何か書かないかと言われ迷ったが、どうせ恥をかくなら書いて恥をかくのとも一興かと思いきり甘んじて引き受けることにしたので以下であり、お暇の折、ご笑読頂ければ有難たい。

満州から着の身、着の仮で引き揚げ来たものの、帰る家がないので、とりあえず父の妹、つまり私にとっては叔母のところへ転がり込んだ。

叔母の家は下北郡川内町の中心街にあったが、それとて借家だったので狭くその上、風呂がなかったので、近くにある銭湯へ通ったりもした。

父は、帰って来たものの、仕事がなく毎日子連れの居候では肩身が狭いので、経験を生かして漁船のエンジンの修理をした

逢坂伸三

り、製材所へ勤めに行ったりしていたが、私の伯父が金木営林署に勤務していたので何か仕事がないかと聞いたところ、当時、米などを配給する食糧営団というところでトラックの運転手を募集しているので来てみないかと言われ、早速面接したところすぐ採用され、私を叔母に預けて単身赴任して行った。

川内町は、町の面積の七割以上が国有林で当時は、その殆んどがヒバ林で町の主要産業は林業がトップ、その次はホタテを主とする漁業で稲作などの農産物は極く僅かなため毎日の主食は、馬鈴薯やカボチャ、大豆などで、米はその間に数粒混っているという生活だった。

そこで、津軽へ行けば米が鱈腹食べられるだろうということだが、そのバスたるや、当時は終戦直後でガソリンが不足のため、薪や木炭を焚きそれから発生するガスで車を走らせると

いう代物で、平地でも時速はせいぜい五十キロ位、坂にさしかかると老人、子供を除き皆、バスから降りて後を押すという状況だったにもかかわらず誰も不平不満を言わず、のんびりとした時代でもあった。

そして、大湊駅に着くとそこからは汽車が出るのだが、それとて明治時代に走っていた弁慶号（見たことはないが）のような小さな蒸気機関車に引かれた木造の客車に乗り野辺地、青森、川部でそれぞれ乗り換えて五所川原へ着いたものの、津軽鉄道は最終便が発車した後、止むなく駅前の旅館に泊る羽目になった。そして、夕食が出ないので途中で買ったリングを食べ飢をしのぎ、翌朝一番列車でやっと金木へ着いたのである。

金木では叔母が、我々が来るといふことでご飯を炊いて待っていてくれた。早速パクついたがその美味しいこと、おかずも要らないと思うほどだった。

勿論、その時代の米は今日我々が日常食べている「ササニシキ」、「アキタコマチ」あるいは、県産米の「つがるロマン」や「つがるおとめ」などは雲泥の差のものだが、それでもその時は、銘柄米以上の美味しさだったと思う。そして翌日は、背負い切れないほどの米を持って帰って来たが、毎日米ばかりという訳にはいかないので薯、カボチャ、大豆を混ぜての生活に戻った。

そうこうしているうちに、父から来いといふことで金木へ来たのだが、そもそも私が金木へ住み着いたのは、その前から始まっている。

当時の金木小学校は木造で、講堂、体操場を備えた立派なもので、小学、中学、青年学校それに女子商業学校などが同居していたが、それが学制改革で廃止された後に青森県五所川原農林高等学校金木分校（現在金木高校の前身）も間借りしていてなかなか賑わいをみせている。

それが忘れもしない昭和二十四年八月、私が中学二年の時のことである。

丁度、その日は夏休みか日曜かなんかで休校日だった。家人が買い物に行つて来てくれといふので立ち上がって街の方角を見たところ、真っ黒い煙がもの凄い勢いで吹き上がっていた。始めはどこかなあと考えたが、あの様な煙であれば学校以外にはないし、もしそうだとすればいくら何でも教材などを取り出さねばといふことで大急ぎで現場へ駆けつけたが、着いてみると、もう手のつけようがなく、消防も只、手をこまねいて見ているだけだった。今まさに焼け落ちる寸前、どしゃぶりの雨が降つて来たのに驚いた。そのため、校舎西側隅に増築した便所が三分の二ほど焼け残り、その分、火災保険が差し引かれたとか聞いたことがある。

それからが大変だった。まず、校舎が全焼してしまったので行き先がない。小学生は現在、役場庁舎が建つてるところにあった公会堂へ、そして中学生は現在、弘前大学農学部附属農場の場所にあった県立農場の施設を借りて学習することになつ

まったのである。

当初は、芦野町にあった伯父の家に四、五ヶ月ほど厄介になったがその後、故あって藤枝へ住み着いた。終戦当時、私は小学五年だったが一年近く休学していたので、川倉小学校へ編入しようかとも思ったが、まもなく中学校といふことで、少し遠かったが金木小学校へ入ることにした。

そこで学校へ行つたがきて、何年に編入したいかといふことになった。先に述べた通り一年近く休んでいたもので正規には六年なのだが、学業についていけなければ困るのではないかと考え、そのようなことで五年に入りたいと申し出たところ、それはお前に任せると先生に言われその通りにした。だから私は、同じ年の人より一年後輩といふことで、四十二の厄払いを二回行ったが、その割には我が人生はあまり平坦な道ではなかったといふ気がしてならない。

さて、学校へ行つたものの学業の方はどうにかだったが、困つたことが一つだけあった。それは、満州では日本全国津浦浦から集まった人々だったので言葉は標準語か共通語だったのに、突然、津軽へ来て皆が喋っている言葉が全く理解出来ないのには正直言つて参つた。

恐らく、相手も「この野郎、どこの馬の骨か」といふような態度で迫つて来るので一寸、薄気味悪かったが、そのうちに馴れるに従つて友達も増えて来たし、津軽弁も徐々に上達し、現在の私は、生粋の津軽衆より上手ではないかなあ……と自負して

たが、仕切りやいろいろな工事のため、すぐ利用することが出来ず、複式学級や午前が一週間、午後一週間に分かれての登校、あるいは天気の良い日には松の木に黒板を掛けただけの青空教室なるものも体験した。

それでも農場は広かったので私達は牧場を走り回ったり、藁を収納する大きな倉庫で隠れんぼをしたりしてそれなりに楽しい日々を送つた。

町では、苦しい財政ながらも小学校の校舎は直ちに建てられたものの、中学校は土地が容易に決まらず、新校舎が建てられたのはそれから二年ほど経つた頃ではないかと思う。

そういえば、金木町から出ていた当時の県議会議員が今思えば選挙運動の一環だったと思われるが「学校を早く建ててやるから君達は一生懸命勉学に励むよう云々」なる趣旨の演説をしていたのを思い出した。

それを真に受けて我々は、校舎建設予定地の草刈りや芝刈りに汗を流したが、その努力は残念ながら報いられず、卒業式は農場の倉庫で行なわれた。

そして、我々が卒業後に建てられた中学校も老朽化して今はなく、営林署から払い下げられた貯木場跡地に鉄筋コンクリートの立派な校舎が建てられているが、今思うに人生といふものは、いろいろな想い出があるとともに、楽あれば苦もあると正に、歌の文句と同じだったように思う今日この頃である。

こんなことも（続・追憶太宰治断片記）

山 中 正 津

▽一日三枚

郷里に疎開中の太宰治にこんな愚問を発したことがある。「先生、小説家は一日何十枚の原稿を書いているもんですか。」「そうだね……。人によっていろいろあるでしょうが、私の場合は……。」

和服の袖の中に両腕を入れた形の腕組をして、一寸間を置いてから、ゆっくり口を開いた。

「一晩に何十枚も書いたという人の話も聞いた事はあるが、私はそんなに書けないね。舂目（原稿用紙）をじっとみつめて、自分の気持ちをぶつつける。舂目を見つめたまま一字も書けない時があるから……。」

まあ、一日三枚書けたら一年に千枚以上の原稿が書けるよね。それがみんな売れたら大金持になるだろうね。ハハハハ……」何か楽しいお話しても語り開かせて、それが自分でもオカシ

クなつたみたいに笑った。

その時、木立さんが上がってきて

「なんの話ですか？」

「ああ、大金持になる話をしてたのさ。ねっ」

太宰先生は、ニヤニヤ笑いながら私の目を見た。私も「うん」とうなづき、小説を書くのは大変な仕事なのだと、何回もうなづいた。

木立さんは、手に白い木綿の袋に入れた細長いものを持っていった。太宰先生の向かいに座ると、その袋から取り出したのは一振りの小刀であった。黒塗りの鞘の漆がところどころはげていて相当古い物のようである。（この刀はなんとかの銘Ⅱ有名刀鍛冶の名を言つてⅡが刻まれてあるんだ）とかなんとか説明していたが、先生はあまり興味なさそうに「フン、フン」とうなづきながら鞘をはらった刀を見ていた。

私は、その光景を見ながら、一日三枚、一日三枚と頭の中で

繰り返していた。木立さん宅の二階でのことである。

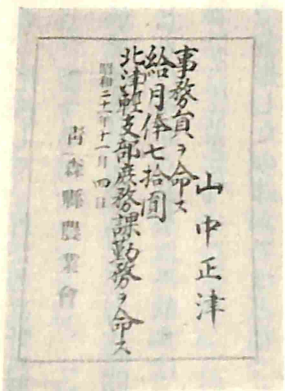
蛇足Ⅱ長兄の文治氏が青森県知事在任中は『県庁内で修治の話をする事はタブーだった。が、例外もあった。秘書課員の福島常作は、文治の口から修治の話聞いたことがある。岩木山を見ながら弘前に向かう車中だったが、突然文治は「わは修治にあまり乱作してはいけない。一作ごとに内容を向上させろ。乱作すれば実入りはいいかもしれんが、マンネリズムになる、と言ったものですよ」と言った。』（津島家の人びとより）

▽偲ぶ会

太宰治は、昭和二十三年六月十三日東京玉川上水に入水。十九日早朝遺体発見、同日午後火葬、七月十八日三鷹市下連雀の黄檗宗禅林寺に葬られる。

その昭和二十三年、この年は私が勤めていた農業会がGHQ（連合国総指令部）の命令により解体され、新しく農業協同組合が設立されることになり、事務整理やら新しい機関への移行準備のため大忙しであった。

私は朝六時五十分嘉瀬発の津軽鉄道で五所川原へ通って



いたのだが、その汽車は通勤・通学者でいつも超満員、座席に座れる者は、始発中里駅、深郷田停留所、大沢内駅、川倉停留所、芦野公園駅まで、金木へくればもう座る席は残っていない。その頃の学生たちは殆ど立っていて、一般の人たちに座席を譲っていたので、金木駅からでも嘉瀬駅から乗る人でも若干人は席を確保することができた。

ある朝、ギョウギョウ詰の汽車の中で、五所川原へ出張する武田村（現中里町）の田中巳代司君（故人）と逢った。逢ったというよりは、小柄な田中君が汽車の窓越しに嘉瀬駅のホームに立っていた私を見つけ、満員の客車の中を私のところへ近寄ってきたのである。村の農地委員会（後の農業委員会）に勤めていた彼は、東奥日報社で募集していた十枚懸賞小説に入選したほどの文学青年であり、又いろいろな情報もいち早く知っていた。「山源の家屋敷は売られたらしい。他の人の物になる前に太宰を偲ぶ集りでもやってみたいものだな」と私の耳もとで囁やいた。私は（エッ！）と思った。「五所川原へ降りてから相談しよう……。」と言って、（なんとという事だ。あの赤い屋根の山源が人手に渡るのか……）とボンヤリと走り去る窓外の景色を眺めていた。

数日後、田中君と打合せしたとおり「太宰治を偲ぶ会」を行なうことになった。記憶は定かでないが、七月の中旬の頃だったろう。青森県知事である文治先生は知事公舎にあって金木の邸宅は奥さんが留守番している筈である。二〇三度太宰を訪れ